



●タイの高専学生への授業事例

10月1日より、後期日程が始まりました。第1週はガイダンスを中心に行ったため、今週から実質的な授業となります。そして同じく今週より、タイの高専のひとつである国立キングモンクット工科大学ラカバン校の短期留学生に対する授業も始まりました。今週は“Basic of Media Design”という授業で、最初に「色名を日本語で書こう」を行いました。

タイ高専の学生は、ひらがなとカタカナは調べなくてもそこそこ書けていました。日本のマンガやアニメなどのサブカルチャーからも日本語を学んでいるようです。漢字については、デジタルデバイスで調べて丁寧に書くことができました。次いで「カラーユニバーサルデザイン体験」を行いました。各学生の好きなスマートフォンのアプリについて、UI評価（User Interface）をした後に、バリアントール（伊藤光学工業製）を装着した際のアプリ画面の色の見えを体験しました。頭の中では“Color Blindness”を知っているものの、実際に体験してみないと理解できないのだと、身をもって体感できたとのことでした。この高専での授業を通して、色彩による日本とタイの架け橋のひとつができたような感覚になりました。（吉澤陽介 主査より：012）

源氏物語の色 -54 「蜻蛉」

薫、二十七歳の三月、浮舟が失踪し、入水と判断され、亡骸のないまま葬儀が営まれた。薫は宇治の地に愛する浮舟を放っておいた後悔と共に女君を次々と失う自らの宿運を嘆き、浮舟の四十九日の法要を盛大に行った。

その年の夏、蓮の美しい盛り、父源氏と養母の紫の上のために明石の中宮が催した追善の法会の後の夕方、薫は、障子の隙間から、中宮の娘である女一の宮を垣間見た。

大人の女房が三人ほどと童女が居て、皆、上着である唐衣（からぎぬ）や汗衫（かざみ）を着ず、くつろいだ格好で、氷を置いて割ろうとして、騒いでいる。女房たちが氷をもてあそぶのを見ている女一の宮の笑顔は、類いまれな美しさで、白い薄物を着て、紅の袴姿であった。傍らの女房は、黄色い生絹の単衣に薄紫色の裳を着て、扇を使っている。

紙に包んだ氷を差し出された女一の宮が、雫が嫌だと言うかすかな声を聞くだけで、薫は無性にうれしかった。そして、このような機会を自分に見せたのは、また以前の様な物思いをさせ、自分を苦しめるための神仏の計らいであろうかと思うのであった。肌が透ける衣姿の女一の宮の美しさと氷で暑さをしのぐ女房達の様子が想像される。（平山和香子）

●大辞泉ひろいよみ 69 ーく

黒玉：くろだま。黒色の玉。黒色の丸いしるし。黒星。黒目のこと。黒い飴玉。打ち上げた花火の玉で、発火しないで落ちたもの。

黒血：はれ物などから出る、腐敗して黒みを帯びた血。あくち。

黒茶：くろちゃ。黒茶色の略。黒みがかった茶色。

黒月毛：くろつきげ。馬の毛色の名。灰色を帯びた月毛。

黒作り：黒漆で塗ったもの。イカの墨をまぜて作った塩辛。

黒土：くろつち。黒い色の土。腐敗した植物質などを含んだ、耕作に適した土。こくど。

くろぼこ。火災にあって焼けた土。やけつち。

黒椽：くろつるばみ。黒に近い濃いねずみ色。喪服に用いる。

黒手縞：くろてじま。江戸時代に渡来した縞織物。紺地に三本の赤い縞模様がある。

玄人：くろうと。技芸などに熟達した人。ある一つのことを専門にしている人。専門家。芸者・ホステスなど、水商売の女性。

黒戸：くろと。「黒戸の御所」の略。

黒鼠：くろねずみ。黒い毛色の鼠。黒みがかったねずみ色。

*大辞泉：小学館発行国語辞典（永田泰弘）